

りつゞきて、すゝみ一夜もかけず、そもく七日のよより十八日までつゞける事は、十三年まへに有しま、也とぞ、

〔本朝文鑑二〕涼賦

渡吾仲

洛陽の東に川ありて、上をかも川といひ、下をまら川といへる。君がちとせの石川や、蟬の小川ともいふなるべし。されば年ごとの六月七日より、十八日の夜もすがら、五條の橋のこなたより、三條の橋をかぎりとして、その川水に床をならべ、繪すだれの繪には、愛宕の雪を思ひ、花むしろの花には、音羽の嵐をさそふ、まして宵月をむかへ、有明をおしめる。こゝに四時の風景をあつめて、そよ時鳥いづち行らん、況やみやこ人の錦繡をかざり、蝶鳥の香も風におふらん、夜は一きは物のはへあるにこそ、さて東西の岸にのぞみて、その家々の挑灯を出し、をのがさまぐの名をまゐるせる。大和山城は名にこそあふれ、鶴屋龜屋のめでたさも、やを屋萬の軒につゞきて、扇屋はよし、此折なるべし。風も柳屋の涼しきには、かりのやどりの西行も、宿かしは屋の色にめでけむ、誰かはまつ屋の松を染かねて、真葛がはらや祇園があなたまで、萬燈のひかりに、白日をあらそひて、沈香火底の管絃をも聞つべし。まからばもろこしの歌吹海には、いかななる事の面白かりけむ。爰の錦城のあそびには、雨に神鳴をもまらざりし、さて年々の河原おもてには、餅あり、酒あり、になひ茶屋ありて、櫻皮焼の煙はふんぐと、三千坊の比叡にたなびき、石花菜コホウサイの瀧はさつくと、八十杯の龍門にみなざる、名も安兵衛が地黄煎をよばれば、味も芳野屋の長命草をうる、辻談義あり、放下師あり、歌祭文には女中をなかしめ、太平記には浪人をたゝましましむ、あるは水囊投に、猿猴の手をのばし、あるは滅多的に王餘の目をふさぐ、辻に早嫁の戀をさへ、橋に乞食の無常をだに、覗からくりの地獄極樂も、都は一錢に善惡を見すれば、一刻千金のあそびの中に、巾著摺はいかに見るらん、○下略